

Cantabile

2017. March

Vol.12

発行

山形県音楽教育連盟
山形県小中学校教育研究会音楽部会

発行日

平成29年 3 月31日



探究的な音楽活動の 成果と今後の課題

会長 三森 聡

今年度の県合唱指導者講習会の講師が小中学校ともに作曲家の若松敏氏に決まっていた。歌詞のイメージや曲の解釈等、児童生徒同士それぞれ幾度も話し合いをしながら合唱をつくりあげてきた。その中で、曲のある箇所の表現解釈に意見が分かれることもあったが、指導者は、曲を表現しようとする思いやその過程を大事にしてきたという。それだけに、当日は、若松氏への質問が多数飛び交った。若松氏は、それを一つ一つ取り上げ児童生徒の思いやそのイメージを大事にしてくださった。今回、こういった児童生徒と作曲家との双方向的なやりとりが見られたのは初めてのことで、まさに受け身ではない児童生徒の主体性を生かした探究的な合唱づくりとなった。

また、NHK学校音楽コンクールで全国一位の快挙を成し遂げた鶴岡北高等学校では、「ホルンの奥まで声をどうやって響かせていくのか。」という昨年度の全国大会で入賞できなかった課題に挑戦してきたようだ。その結果、息が止まらない鳴らし方と下半身をしっかりと支えた体の使い方がその克服になったという。鶴岡北高音楽部への取材動画「知りま庄内」の中で、生徒一人一人が自信を持ってインタビューに答えており、自分ごととして捉えているその姿に逞しさを感じた。

一方、探究的な音楽活動を進めるにあたって、「読譜力」に課題があることがわかった。楽譜は、音楽表現の根拠や学び合いのための媒体となるだけに「読譜力」は不可欠になる。

探究型学習を研究してきたある学校での読譜力の調査では、中一の八月の段階で、音譜や記号の読めない生徒が約八十五%と多かった。これは、小学校での基礎的な読譜力が身につけていないままに中学校に送り出していることが要因等と考えられ、今後の読譜力の育成につながる小中連携の必要性を強く感じた。

村山地区

【小学校】
期日 平成二十八年八月三日（水）
会場 山形市霞城公民館

内容

「心を育む音楽活動は人生も紡いで……」
合唱で培う力を考える」

講師 霞城の森合唱団代表

今井 俊子氏

1 子どもに学ぶ

◇私が出会った素敵な子ども達
歌う体験が自分の根となり、自分らしく前向きに生きる若者へ成長する。教育は長いスパンであり長きに。
◇友達と先生と響き合う積み重ね
心と歌声が通じ合う時間と空間の繰返しがすばらしい学級・学年を作る。
◇どの子も伸びる存在
レッテルを貼らずにどんな芽を出すのか、姿勢・目の輝き・声の張り等から成長を認め、自信を持たせる。

2 心揺さぶる体験をめざした発信の場・形の工夫

◇より質の高い表現の追求
憧れを持てる選曲することで心と身体が鍛えられ、達成感が得られる。
◇メッセージとしての音楽に
伝えたい思いが確かな技術への願望となり、それがやがて自分自身でしっかり生きていく力になる。
◇教師の準備・教材研究の大切さ
むずかしいことをやさしく
やさしいことを深く
深いことをおもしろく
(井上ひさし 座訓)



3 実技指導 歌いましょう！

「群青」の合唱

作詩 南相馬市立小高中学校 卒業生
作曲 同 教諭 小田 美樹

この曲は東日本大震災による津波で百六十七名の生徒のうち二名が犠牲となり九十七名が原発事故による避難のため、全国に散り散りになり、生徒達が「群青の町」で再会を願う思いを歌にしたものだった。今井先生が毛筆の楷書で準備してくださった歌詞を見ながら、歌詞・旋律・強弱等、好きな箇所を意識させ、歌いたい気持ちの醸成法を学んだ。

4 まとめ

今井先生のお人柄に魅了された研修だった。今日もどこかで同じ空を見上げてがんばろうと思えた一日だった。
担当 岸（谷地南部小）

庄内地区

【田川地区】 小学校合唱指導者講習会
期日 平成二十八年七月二十八日（木）
会場 出羽庄内国際村

内容

「子どもの意欲を引き出す合唱指導」
講師 富澤裕氏（作曲家・合唱指導者）

(1) 合唱指導の実践Ⅰ

鶴岡市立鶴引西小の五年生がモデル合唱団となり、「With a dream」を信じて」を指導いただいた。「今の自分たちの合唱は何か」という問いかけをし、減点した部分をどう改善するか、子どもたちに考えさせる様子が印象的だった。「上手になりた」という意欲を子どもたちの中から引き出す指導により、歌声はどんどん変わっていき、素晴らしい合唱となった。

(2) 合唱指導の実践Ⅱ

富澤先生が作曲された合唱曲「スタートライン」「生きる」「Believe」と「ひとつぶのいのち」を歌いながら指導いただいた。作曲された経緯や意図をお話しいただき、楽曲の本質に触れることができた。その上で、言葉を活かすための休符の感じ方や、強弱記号のとらえ方・表現の仕方など、各校での合唱指導に生かせることをたくさん学ばせていただいた。

担当 高橋（豊浦中）

【飽海地区】 東北音研に向けての研修会
期日 平成二十八年八月一日

会場 酒田市立松原小学校

内容

「音楽教育の現状と課題
『酒田飽海大会に期待するもの』」

講師 文科学教科調査官 白井 学先生



講演の主なポイント
・指導要領改訂の動きもあるが、現行の内容をしっかりやって欲しい。
・指導と評価の一体化を。指導したことの評価をすることが出来る。
・授業のスタートは実態把握から。小・中学校の系統性を考えるときも、実態把握が大切。
・「知覚」と「感受」をしっかりとらえる。子どもは知覚したことと感受したことを分けては考えない。指導者がしっかりと押さえておく必要がある。
・授業の中に、音や音楽によって「心が動く瞬間」を作る。うつむいていた子どもが顔を上げたり、笑顔になったりする瞬間があると良い。
担当 海藤（富士見小）

置賜地区

期日 平成二十八年十月六日（木）
会場 白鷹町立荒砥小学校

内容

音楽の授業づくりについての講演
「今、音楽科の授業で大切にすること」

講師 山形市立第九小学校長

岸 純一氏

1 音楽教育で育てたい子どもとは

「社会や時代が変われば、求められる子ども像も変わり、当然のことながら、音楽教育も変わる」今の時代は、猛スピードで変化し、価値観は多様化している。これからの時代は不確定であり、「生きる力」「共に創り出す力」が必要となってくる。

そこで今、音楽教育では「感じて、考えて、表現して、学び合う子ども」を育てていきたい。

2 具体的に授業では……

鑑賞の力をつけることについて
① 曲とどう出会わせるか（質的必要感）
また、飽きさせずに、繰り返し聴くこと（量的必要感）が大切。子どもの感想に寄り添い、友達同士、そして先生と子どもをつないでいきたい。そのために、感受したことを引き出す教師力が必要である。



② 感じたことが、どんな音楽的な特徴からくるのか教材の特徴を探ることが大切

「共通事項」を音楽を形作っている要素と考えることや、扱う要素を絞り込み、他の要素に触れない授業は間違った認識である。

③ まとめの鑑賞や表現で、②で探ったことを実際の音で確かめることが大切である。

④ 鑑賞の力は、必ず表現の思いや意図につながる。習得したことを転移・活用を意識して指導していくことが大切である。その他、明日の授業から使える具体的な指導法を、リズム打ちや、歌ったりしながら教えていただいた。「音楽の授業が大好き」と言える子どもを育てていきたいものだ。

3 参加者の感想より

今まで「考える」ことをメインに置いた授業をしてきたが、これからは、岸先生のように、子どもの感じ方に寄り添いながら「感じる」授業を大切にしていきたい。

担当 中村（飯豊一小）

歯を出して歌うと明るい声になり、隠すと暗い声になることなどが分かったと、より表現が豊かになる。

(2) 思考・判断・表現の評価について

本時では、生徒たちが楽譜から読み取った内容を言葉にして、実際に歌ってみる姿があった。歌ってみて、さらに表現を変えたり元に戻したりすることができると思考・判断ができていけると言える。表現の工夫を話し合うことはできていたので、それを合唱の中で実践できるといい。音楽の題材の中には、必ず思考・判断・表現の項目を入れ、確実に評価していかなければならない。

(3) 課題の質について

子どもの実態から課題の質を考えたい。今必要な力は何かをとらえ、その力をつけるための課題を設定する。そこから深い学びにつなげるには、いかに知覚・感受させるかが重要であり、そのためには、子どもたちの主体的な姿、思考・判断・表現、知識・技能を結び付けていくことが大切である。

担当 門脇（向町小）



高等学校

期日 平成二十八年六月十六日(木)

十七日(金)

会場 山形県立長井高等学校 南陽市

文化会館

内容

研究授業 音楽Ⅰ「楽箏に親しむ」

山形県立長井高等学校教諭 戎谷 敦

研究発表

童謡「この道」を題材とした 高等学校

校音楽Ⅰの授業における指導の一考察

山形県立北村山高等学校教諭 板垣和子

講演会「展覧会の絵」

(ピアノによる全曲演奏)

ピアノニスト 木曾真奈美

公立高校では琴(約十五箏)を四〜五校ずつ一〜二月毎に回しており、二人で一箏を弾くことができるようにし、約一か月体験するようである。戎谷敦教諭の研究授業では、その最後にあたる場面で、「さくら」の二重奏にしてある曲を演奏し、生徒同士で評価し合っていた。年間スケジュールの中でちょうどこの時期にあたったようである。

講演会では、昨年完成した木造四階建てでギネスに載った南陽市文化会館の大ホールにおいて、ピアノニストの木曾真奈美さんによるムソルグスキーの「展覧会の絵」を全曲鑑賞することができた。一日目に展覧会の絵にまつわる沢山の話を聞き、二日目の午後はその演奏を堪能した。一四〇〇人のホールに三〜四十人。とても贅沢な瞬間だった。(著作権により写真は撮影していない)

音楽は「時間の芸術」とよく言われるが、とにかく時間と心の余裕が必要なのは言うまでもない。その時間は自分で工夫して確保するしかないが、年に一度のこの二日間には音楽の教員として不可欠である。一校に一名配属されている可否かの現状で、各自が抱える諸問題はたいへん多く、今回は特に発言や意見が活発に交わされた大会となった。それだけ有意義な研修となり、これからも教員研修の場を大事にしていきたいと強く感じた。

担当 大沼(東海大山形高)



県音楽教育連盟 新テーマについて

「つなぎ合おう」

人・思い・音楽

酒田市立西荒瀬小学校長 佐藤 文雄

平成三十年度の東北音楽教育研究大会山形大会(酒田鮑海大会)に向けて、「つなぎ合おう 人・思い・音楽」を大会主題に掲げました。県音連でも、平成二十七年よりこの主題を共通のテーマに掲げて頂いております。

本テーマは、第六次山形県教育振興計画のテーマにある「つなぐ」がキーワードになっており、「人間力に満ちあふれ、山形の未来をひらく人づくり」に、音楽教育の現場から寄与していく決意が込められています。また、よりよい音楽を仲間とともに作り上げていくプロセスには、探究的な要素も求められるはずであり、山形県の重点教育課題に迫るテーマでもあります。

当初、音楽の授業づくりにおいて次のようなことを大切にしていこうと話していました。

○仲間とともに音楽をつくっていくよろこび・楽しさ

○内なる音楽への思いと音楽との往還

○音楽を通して心が動く瞬間

酒田鮑海地区では、夏に文部科学省教科調査官、臼井学先生をお招きして、「新学習指導要領の方向性とこれからの音楽教育」について研修しました。新指導要領の内容については、現指導要領の考え方がベースになっており、これまでの実践の成果と課題を現指導要領の趣旨に照らし合わせていくことから始めていくことが大切だと再認識しました。

また、秋の授業研究会では、県教育センター指導主事の大宮裕一先生をお迎えし、こ

れから求められる音楽教育の重要なポイントについて研修しました。現在、研究主題をより具体化していくために、授業づくりの「視点」について、大宮先生の助言を頂きながら検討しているところです。

私たちは、これからも、「音楽の楽しさにあふれる授業」、「演奏と心が高まっていく授業」を目指していきたいと思っております。



あとがき

平成三十年度に行われる東北音研酒田・鮑海大会にむけて、二十九度はブレ大会が行われます。この「つなぎ合おう 人・思い・音楽」のテーマから、改めて人とのつながり、音楽の楽しさ、喜びを大切にしたいと感じるとともに、全県でこの研究を盛り上げていきたいものだと感じたところです。

担当 色部(南沼原小)

小島(蔵王一中)

斉藤(山十中)